

存在するといふことである。

### ○薩南の植物景

圖版第一版解説 日向の青島に蒲葵の森があつて熱帯風の景致をしめすことは世人の知る通りであるが薩摩の南端谷山附近でも棕櫚の木蔭に甘蔗畑が茂つてゐたり枕崎の街道の傍に人の背よりも高い仙人掌の木がうばつてゐるところ、何といつても薩摩は南國ではある。

### ○中等教員地理科本試験口述試問

第一日(十二月十六日)

#### 第一室

紅土の標本を示し其の分布を説明せしむ。

陸地測量部發行五萬分の一地形圖「石動」圖幅を示し地理景観を説明せしむ。

#### 第二室

アフリカの地圖を示し同大陸の自然及び人文地理を説明せしむ。

#### 第三室

陸地測量部發行五萬分の一地圖「油木・新見」兩圖幅を示し岡上に現はれたる人文景観を説明せしめ兼ねてそれと地形との關係に及ばしむ。

#### 第四室

鐵、石炭、石油、棉花の世界産出のグラフを與へてそれが産出曲線の動態に付き説明せしむ。

第二日(十二月十七日)

### 質疑應答

ヨーロッパの掛地圖を示し主要炭田に付き自然地理的及び人文地理的に説明せしむ。

### 質疑應答

問 ボーランド廊下 (文檢豫備)

答 Corridor を英和辭典でひくと廊下、又は覆道とかいてあるが、廊の下といふ漢字では何のことかわからぬ、もしこれを家屋内の通路といふことだとすれば、廊下の下は、日本語として不當である。渡廊といふ古語の方が正しい、ボーランドの地形を支配する交通路としてのヴァイスチユラ川のことを Vistula "Corridor" といつてゐる、その沿岸はこの國での重要農業地域であり、工業地域である、従つてこの川は經濟地理上最も肝要な渡廊といつてよい。(藤田)

問 蚌埠 (文檢豫備)

答 蚌埠は近頃石友三軍の獨立で名高い、蓋しこの地は淮水と浦口線の交點に出來た新市場である、淮水の流水は上流信陽まで舟楫の利があるのみでなく、鐵道によつて北は徐州をへて山東、河北、河南、陝西に達し、南は浦口、南京をつらねて江浙の富饒を集める。大運河の便は吳王夫差以來開かれて三千年。安徽省中唯一の埠頭である。蓋し従前汽車のなかつた當時は肝胎、鳳陽、泗州などが天下の要樞として發達したのであつたが蚌埠が開けて、これら三市の富をこの一點に

集中した形である、故に漢史方輿記要にもこの邊の形勢を論じて、建業(南京)之肩背、中原之腰脊とのべ、秦より以後、東南事故多く、淮泗の間に起る者往々天下の雄となり、南北朝の時、鍾離常に重鎮たりと論じた。南京の都に對して戰略上の位置から、この語は直ちに蚌埠の説明になると思ふたからこゝに之を援引して讀者の一察に供する。(藤田)

問 グランチャコ (文檢豫備)

答 南米パラニヤ川の下流はバマバ地帯を通る。その流域は西へ行けば行く程雨が少い、雨量の多少に基き或は草原となり、不毛地となり、灌木叢地となる。北アルゼンチンの北部ホリヰイヤの南部、パラグアイの西部、三ヶ國に跨つて、サザアンナ風の草地と赤林が展開する。その廣い土地に Green Chaco の原野といふ名がある。その意味は「大なる狩獵の原」といふことである。この原野の一部パラグアイとビルコマイオ川との間の三角形の地(南米のメソポタミヤ)はホリヰイヤとの間に國境問題を惹起し、いまだ決然しないまゝである。この國境抗爭地から南へかけての大平原は、近頃開拓大に進み景観も一變してきて又昔日の狩獵の原ではなくなつてきた。(藤田)

問 南九州の人文 (文檢)

答 八代より大分に至る南緯中央線を以て九州の南北を分つと、北と南とに地質地形の著しき差がある、氣候も南の方は暖かくて亞熱帶性の土地があるが、さうした自然と氣候とが

影響して南九州の人文は北九州とは全くちがう、蓋し九州山系の峻峯が交通を阻害するからであらう、人口分布をみても南の方は格段に稀薄であつて、北方には山門三池地方の如く一平方軒七百人にも達するが、南では白臼杵郡の如き僅に三十八人に過ぎない、宮崎鹿兒島の山手には天然林の面積が猶廣大であり、人工造林もひろい、農産でも陸稻が多く水田が少い、甘藷を常食とするから米の消費料の如き一人の平均一年六、七斗に達しない。都會の如き北方には五萬以上の都市十四を算するに、南は鹿兒島は十三萬八千を算するが、宮崎、都城何れも四萬内外であるしかも近村を併合した結果僅に市になつた程度である(昭和四年十月)。かうした經濟の發展に従つてこの地方は原料生産地たるに止まる、人文地理上最も面白いことは、九州の方言が長崎系統、大分系統及鹿兒島系統の三つにわかれる事實であつて、球磨川の上流でさへ北九州の方言であるのに、一步九州山系をこえると、宮崎鹿兒島共に方言が一變して全く閉きとられることである。島津藩の頃土族が村に住んで麓といふ地主的位を置しめた(否さうした土族の家のあるところを麓といつた)一般の農民はその下に小作をしてゐた程度であるから、平民の生活は餘程、みじめな状態であつた、さうした情力が今も猶南九州の聚落を支配してゐるらしい。古代史に從へば卑人といふ異民族があつたといふことであるが、その原流は海の幸を得た南洋からの人ではなかつたかと考へられる節がある。この點幾分其人文が北九州とはちがう原因であらう。(F)